

九鬼哲学における「永遠の今」とは何か。この問いへの答えは二方向から探ることができる。一つは「回帰的時間」における「永遠の今」。それはある事柄が同一性をもって無限に繰り返される瞬間であり、形而上学的・神秘的体験として語られる。もう一つは偶然性の根底で開示される「永遠の今」。こちらは、私たちがふだん経験する流れてゆく時間の根底にあって、私たちの現実を可能にするものと位置づけられる。本発表では、とくに後者の「永遠の今」に注目し、そこで考えられている「永遠」の指す内容と、永遠が「今」として限定されることの意味について考えていく。

彼にとって偶然性とは、現実そのものである。現実とはただ何ごとかが生じることではない。様々な可能性があるなかで、「いまここ」に「このよう」に現れ、私を触発するもの、それこそが現実であり、そうした現実が生成する瞬間（現在）を捉える様相こそ偶然であった。「永遠の今」は、この生成する現在／偶然の根底で開示される。そこで彼が言う「永遠」とは、時間を超越した変わらない本質という意味ではない。「生成」という言葉に表れるように、現実を世界へと押し出してくる「生の鼓動」こそ、九鬼の考える「永遠の本質」であり、現実が「生の鼓動」によって「このよう」に象られていることを、人は偶然の現在において感じ取るのである。

だが、流れゆく時間のなかで偶然性に気づき、「永遠の今」に至るのは容易なことではない。人はいかにして「永遠の今」にアクセスできるのか。この問題に対する九鬼の回答が詩、とくに押韻などの形式を重視する律格詩であった。詩は、質的時間としての持続する現在を表現する。たとえ、詩の中で時間の流れが詠われようと、その体験は「現在の一点に集注」するものであって、詩を形作るリズムや韻は、「永遠の現在の無限な一瞬間に集注させようとする」（4/51）ための仕掛けであると彼は考える。異なる意味でありながら、たまたま同じ音をもつ言葉たちが詩のうえで出会う。同じ音が並ぶことで、その音の響きは強められ、その音の一点へと意識は集注していく。押韻とは、言葉の偶然性に基いて現在を集約する働きといえる。それは、単なる音の一致という言葉遊びではない。この意味を表すために、この形で文字が象られ、この音が与えられているという、言葉が「このように」与えられていることへの驚きである。だからこそ、九鬼は「偶然性を音と音との目くばせ、言葉と言葉との行きずりとして詩の形式の中へ取り入れることは、生の鼓動を詩に象徴化すること」（2/220）と語った。律格詩とは、言葉が「このようにある」ことと出会い、その驚きを韻やリズムで深めていくことで現在の根底にある生の鼓動へと導く回路であった。こうした律格詩でアクセスされる「永遠の今」の有り様を分析したうえで、「回帰的時間」の「永遠の今」との異同を検討して本発表の結論としたい。

*『九鬼周造全集』（岩波書店、1981-1982年）からの引用は（巻号／頁数）で引用箇所のとに示した。